

浅間山麓のペンション経営者グループと共同で実施している「明るく楽しい浅間山学習会」  
Cooperative Program with the Local Pension Owners: Happy Sunny Asama Workshop  
早川由紀夫(群馬大学教育学部)  
Yukio HAYAKAWA (Gunma University)

「明るく楽しい浅間山学習会」(山本正幸命名)を2004年9月から現在までに6回開催した。今後も続ける予定である。

東京都品川区のレストランで行った第1回(9月15日)と第3回(12月2日)は、インターネット上にもうけた情報交換の場「まえちゃんねっと火山情報掲示板」のオフライン懇親会の色彩が強かったが、それ以外の4回は現地浅間山における野外学習会として実施した。

第2回(10月30-31日)は、国立大学共同利用施設・草津セミナーハウスに宿泊して行った。初日は室内で講演会を行い、翌日野外に出た。野外では、浅間山の過去の噴火が残した地層や地形を観察したあと、火口から5.5キロの地点で2004年火山礫を採集した。9月1日の火山礫が2ヶ月たってもそのまま芝生の上に残っていることを知って参加者から驚きの声が上がった。また4センチを超える大きな礫がたくさん降った事実を知って、次の爆発が起こったら被害が出るのではないかと心配する声があった。参加者38人(うち宿泊者32名)のほとんどが東京圏からの参加だった。地元からの参加は、この回は、少なかった。

第3回までは、私が日時・場所・内容などすべてを決めて参加者を公募して実施したが、次の第4回は違った。4月の初めに地元のペンション経営者から「観光業者向けに浅間山の学習会をしてほしい」と依頼があった。面談して企画を詰めることにした。宿泊客誘致の目的で浅間山の火山見学コースを作成し、それに沿って現地を案内してほしいという希望もあったが、火山としての浅間山の成り立ちを宿泊業者自身がじっくり勉強することにねらいを定めた。実施日を4月25日(月曜日)と決め、1783年噴火の痕跡を何ヶ所か訪ねることにした。参加者募集はインターネット掲示板での告知と個人勧誘を併用した。ある観光施設がマイクロバスを運転手つきで無料提供してくれたので、参加者23人全員が同じ車で移動することができた。内訳は、宿泊業9人、その他の観光業7人、別荘所有5人、地元住民2人だった。この学習会の模様は、同日20時45分からのNHKテレビ関東ローカルニュースで「観光業者が浅間山の勉強会」として1分20秒にわたって紹介された。

第4回学習会は、参加者から好評を得た。次回を望む声に押されて、1ヵ月後の5月30日に第5回を実施した。参加者は31人に増え、平安時代の火砕流堆積物や2万4000年前の流れ山を見学した。第6回は6月27日に実施した。24人が黒斑山中腹まで登山して、2004年9月1日の火山弾とクレーターを見た。

浅間山麓の観光業者の中には、浅間山のニュースをテレビで放送してほしいと否定的な意見を述べる人もいる。そのようなひとたちは、昨年9月1日の噴火のときに、真っ赤な爆発の瞬間がテレビで繰り返し流されて、観光地と

しては致命的な悪印象が視聴者に植え付けられたと信じているようだ。地域経済にとってあのような噴火映像が流布することは害毒であると考え、悪夢が再来することを恐れている。彼らは、昨年の浅間山噴火が消費者の記憶からすっかり消えてしまえばよいと願っているようだ。第4回学習会のテレビニュースはこのような雰囲気の中で放送された。放送後、地元では賛否両論があったという。

人々の記憶から消え去ることを待つような消極的な態度で、浅間山麓の観光業を健全に発展させることができるだろうか。私はたいへん疑わしいと思う。浅間山の噴火から目をそむけるのではなく、噴火によっていまの浅間山と山麓がつくられた事実を受け入れて、浅間山をよく知りよく親しみ、母なる浅間山の麓で生かされていることに感謝の念をもって業をなすべきだと強く思う。

昨年の噴火後に観光客数の落ち込みがあったのが事実なら、それは必要に迫られた消費者がみずから情報収集して正しく選択したリスク回避行動の結果である。それを風評被害だというのは当たらない。風評被害とは、ありもしないことが噂として巷間を駆け巡って、その結果として特定業者に経済的被害が生じることをいう。昨秋、浅間山に噴火リスクは確かにあった。ありもしないことではなかった。

ただ、東京圏に生活する一般の消費者にとって、浅間山・軽井沢・北軽井沢・嬬恋の地理空間を正しく認識することはむずかしいだろう。浅間山にリスクがあると聞くと、いきおい軽井沢・北軽井沢・嬬恋も危ないと判断してしまいがちだ。軽井沢・北軽井沢・嬬恋の観光業者は、わかりやすい地図を用意して、浅間山のどんなリスクがどの範囲まであるのかを消費者に偽りなく説明する義務を負っている。この義務を果たした上で、地元業者は、生きている火山の脅威を目の当たりにできる魅力的なプログラムを組んで観光客の誘致をはかったらどうだろうか。これは、いま浅間山麓でしかできないことである。リスクを正しく評価して管理すれば、そのようなプログラムを安全に実施できる。

こういったアイデアを実現するためにも、現地学習会を今後も継続していきたい。すでに7月と9月に次の予定が立てられている。楽しみである。

明るく楽しい浅間山学習会の記録

- 第1回 2004年9月15日@品川
- 第2回 2004年10月30-31日@草津、38人
- 第3回 2004年12月2日@品川
- 第4回 2005年4月25日@嬬恋、23人
- 第5回 2005年5月30日@嬬恋、31人
- 第6回 2005年6月27日@しゃくなげ園、24人
- 第7回 2005年7月23日@嬬恋(予定)
- 第8回 2005年9月26日@嬬恋(予定)